

# 教職あらかると

## わたしの道徳授業 No.5

2020.06 後藤 忠

### <わたしの道徳授業 10月号 1980年>

#### 1 「友情」の意識調査をしてみた

教育研究員の時、久保千里校長先生から、「こんな意識調査もあるからやってみないか。」と紹介された本が「道徳指導と評価」(明治図書)(注:廃刊)であった。その中におもしろい事例がのっていたので参考にして意識調査をこしらえた。

##### 事前調査 1 2年3組 ( )

###### もんだい

たろうくんは あそんでいるとき あやまってきょうしつの花びんをこわしてしまいました。いっしょにあそんでいた 友だちのまり子さんに「先生やみんなにいわないでね。」といいました。

\* あなたがまり子さんだったら、どうすることがいちばんいいと おもいますか。つぎのどれでしょう。ばんごうを○でかこんでください。

- 1 たのまれたけど はなしてしまう。
- 2 たのまれたのだから だれにもはなさない。
- 3 だれかにきかれたら はなすし、きかれなかつたらはなさない。
- 4 じぶんがこわしたとおもわれるのがいやだから、はなす。
- 5 友だちのことだから いやだなあとおもうけど、はなす。

私なら、さしずめ3か5に○をつけるかなあと思いつながら「結果の分析」を読んで、なるほど思った。

- |         |             |
|---------|-------------|
| 1 拒否的友情 | (男4、女7、計11) |
| 2 積極的友情 | (男5、女4、計9)  |
| 3 消極的友情 | (男5、女2、計7)  |
| 4 自己中心的 | (男2、女2、計4)  |
| 5 妥協的友情 | (男5、女7、計12) |

合計 43

2が友情密度?が1番濃いということか。どうも私は善悪の判断が先行して大人の発想をしていると思った。

この結果を久保校長先生と次のように考察した。

- 拒否的傾向は女の子に多いが、「正直」との葛藤がある子がいるようだ。
- 学級の2/3近くが「仲よし」の傾向をもつ。
- 日常の観察とほぼ一致する。
- 特に、拒否的傾向、自己中心的傾向の児童に注目して、授業の中で考えさせる機会をもつ。また、研究員で作った意識調査も実施した。

##### 事前調査 2 2年3組 ( )

###### なかよししらべ

- 1 あなたは、友だちにたすけてもらったことがありますか。(ある18、ない25)
- 2 あなたは、友だちをたすけたことがありますか。(ある21、ない22)
- 3 あなたは、友だちにはげまされたことがありますか。(ある28、ない15)
- 4 あなたは、友だちをはげましたことがありますか。(ある16、ない27)
- 5 友だちとけんかをしたことがありますか。(ある20、ない23)

この結果から、次のように考えた。

- 「助け合い」について、自分がしたことはおぼえているが、他からしてもらったことはあまりおぼえていないという低学年の傾向が表れているのではないか。
- 何気なしに言う「はげまし」の言葉が、相手の心に強い印象を残すことをあらわしているのか。いずれも、意識の強弱の問題であろう。
- けんかをしたことがないという回答が多いのは驚くが、さ細なことでよくけんかをしている様子から考えて、子どもはどこまでをけんかとするかで回答がちがってくる。この結果をそのまま受けとめると、仲よし意識の強い子が多いと考えてよさそうだ。

#### 2 学習指導案、できる

事例を用いた簡単な質問紙法や行動観察などからつかんだ児童の実態をもとに学習指導案の作成に着手した。

## 道徳学習指導案

(1) 主題名 泣いた赤おに

(2) 主題設定の理由

○ 前段は主題に対する指導観 <略>

○ 中段は児童の実態

2年生も2学期になると自他の識別がはっきりし始め、自分と比較して他を見るという目がきびしくなってくる。本学級の児童は進級時にクラス編成替えをしたが、2学期に入ってようやく新しい仲間ともなれて親しくなってきた。しかし、友だちどうし共同してものごとを作ったり、協調し合っまとめたりすることはできない。そして、まだ自己中心的であるために、自分の欠点が見えず、人の欠点ばかりが目について、すぐつげ口をしたり、いさかいが絶えない。また反面、一緒に遊んだとか、困っているとき助けてもらったというさ細なことから友情が深まったりする場合がある。

○ 後段は資料観 <略>

(3) 本時のねらい

友だちと仲良くし、互いに助け合い、はげまし合おうとする心情を育てる。

(4) 展開 (授業記録とともに3で述べる)

(5) 評価

友だちと仲良くし、互いに助け合いはげまし合おうとする心情が育ったか。

### < 改作資料「泣いた赤おに」 >

※ ( ) 内はペープサートなど

#### <<第1画面：山奥の1軒屋>>

どこの山か分かりません。その山の奥にこころのやさしい1びきの赤おにが住んでおりました。

(赤おに登場)

「さみしいなあ。ぼくはさみしくてしかたがないや。ふもとの村の人間たちと友だちになれたら、どんなに楽しいだろうなあ。何か友だちになるいい方法はないかなあ…。」

そうだ、立札だ。立札を立てて、みんなに来てもらおう。」

赤おにはにこにこしながら、一生懸命心を込めて立札をこしらえました。

(立札登場。画面の針金フックにかける)

「よし、できた。こころのやさしいおにのうちです。どなたでもおいでください。お茶もおかしもございます。 あかおに

字もじょうずに書けたし、これならだれでも読めるから、友だちがたくさんできるにちがいない。だれか来ないかなあ…。あつ、来た来た。では、家の中で待つことにしよう。」

一日の仕事を終えた村人がやってきました。

(村人登場)

「今日も1日よく働いたなあ。さあ、早く家に帰ろう。あんれ、こんなところに立札があるぞ。何々？(立札を読む。) ちょうどのもかわいているから、お茶を一杯ごちそうになっていこうかな。」

中にいる赤おにはにこにこです。

「いや、まてまて。どうせおにのことだ。うまいことを言って、だまして俺を食うつもりかもしれないぞ。ああ、こわいこわい。うっかりさそいこのったら食い殺されてしまうところだ。」

赤おにはこの言葉に腹を立てました。

「だれがだまして食うものか。」

「わあ、おにだ、おにが出た。助けてくれ。」

(一目散に村人退場)

「おい、ちょっと待って。ぼくはただ、君と、友だちになりたいだけ…。 ええい、こんな立札、役に立たない。こうしてやる。」

せっかく心を込めてこしらえた立札を赤おにはめちやくちやくにこわしてしまいました。

#### <<第2画面：腰を下ろし、空を見上げる赤おに>>

そして、すっかり元気をなくして、ぼんやりとすわり込んでしまいました。

「おおい、赤おに君いるかい。(青おに登場)

おい、赤おに君、いったいどうしたんだい。久しぶりにたずねてみれば元気がない。おなかがいいたいのか。熱でもあるのか。どうしたんだ。」

「ちがうんだよ、青おに君。実はね、かくかくしかじかだったんだよ。」

「ふうん、そうか。かくかくしかじかだったのか。それは気の毒に。君の気持ちはよくわかる。よし、ぼくにまかせておけ、いい考えがある。」

「うん、それはいい考えだ。」

「まだ何も言ってないよ。まあ聞けよ。ぼくはこれからふもとの村へおりて行って、大あばれする。」

「じよ、じょうだん言うなよ。今でもおには人間たちにこわがられているのに、そんなことをするとおにの信用はもっとなくなってしまうじゃないか。ぼくは反対だな。」

「話は最後まで聞くものさ。ぼくが大あばれしてい

るところへ君がやって来るのさ。そして、ぼくの頭をポカポカなぐるんだよ。そこで、ぼくは逃げていく。村の人たちは、悪いおにを退治してくれた君を信用して、きっと遊びに来てくれるよ。」  
「う～ん、それじゃあ君に悪いよ、すまないよ。」  
「何を言っているんだ、君と僕とは親友じゃないか。困っているときに助け合うのが親友さ。じゃあ、ぼくは先に行っているからね。きっと来るんだよ。」

#### 《第3画面：村人の家の中》

ここは村人の家の中、おじいさんとおばあさんが話をしています。

「おばあさんや、きこりの田吾作が山でおにに襲われたそうなの。おつかねえこったなあ。」

「そうですね、おじいさん。私らも気をつけましようね。」

(暴れる青おに登場)

「ウオー、おにだぞ、青おにだぞ。とって食うぞ。」

「ウオー、ワオー。」

「うわあ、おにだ。助けてくれー。」

おじいさんとおばあさんが外へ逃げたのをたしかめて、青おには、とんだり、はねたり、体当たりしたりの大あばれ。

(赤おに登場)

「やい、弱い者いじめをする悪いおにめ。天に変わってこらしめてやる。えい、えい。(黒板を叩く)」

「(小声で) もっと強くぶたなきやだめだよ。」

「わかった。えい、えい。… (小声で) もういい。青おに君、早く逃げて。」

「よし。」

と、逃げようとした青おにはなべにつまずいて太い柱に頭からガツーン。

「あいたたたた…」

(青おに退場)

「(小声で) おい、青おに君、だいじょうぶか。」

(青おにを追って赤おに退場)

逃げていくおに、追いかけるおに。その様子を戸口のかげから、おそろおそろ見ている村人たち。

「おい見たか、あの赤おにを。普通のおにとはちよとちがう。悪いおにを退治してくれた。それにあの赤おに、人間たちと仲よくしたがついているらしいよ。」

「明日、みんなでお礼に行かないか。」

「うん、そうしよう。」

#### 《第4画面：村人と楽しく過ごす赤おに》

さて、次の日です。

「ごめんください、赤おにさん。村の者です。昨日は助けていただいて、どうもありがとうございます。おかげでみんな大喜びです。きょうはみんなでお礼にまいりました。」

「よく来てくれましたね。さあ、どうぞ中へお入りください。お茶もおかしもごさいます。さあさあ、どうぞ。」

それからというもの、村人たちが毎日のように遊びに来て、赤おにの家からは歌声や笑い声が聞こえました。

「ぼくは幸せだなあ、うれしいなあ、楽しいなあ。

これもみんな青おに君のおかげだ。(間) そういえば青おに君、どうしているかなあ。あれからちっとも顔を見せない。あの時、柱に頭をぶつけて、ね込んでしまったのかもしれない。心配になってきた。いそいで様子を見に行くことにしよう。」

よく朝、赤おには夜明けの低い雲にとび乗ると、一目散に青おにが住む岩山へと向かいました。

#### 《第5画面：青おにの家の前、一輪の白百合》

「おおい、青おに君。いるかい。ぼくだよ、赤おにだよ。(黒板をトントンたたく。) 変だなあ、返事がない。青おに君！ おや、こんなところにはり紙があるぞ、何々。」

#### 《第6画面：はり紙》

(音楽の先生に選んでもらったBGMを流す。)

赤おにくん

にんげんたちとは なかよくまじめにつきあって、いつも まじめにくらしなさい。

ぼくはしばらく きみとおわかれ、この山を でていくことにきめました。

ぼくときみとが いったり きたりしては にんげんたちもこわがって ちかよらないかもしれません。

とおいたび ながいたび、けれどもぼくは どこにいても きみのことを思っているでしょう。きみのだいじなしあわせを いつものっているでしょう。さようなら、赤おにくん。

どもまでも きみの友だち 青おに

(最後の1行は2度繰り返す。)

#### 《第7画面：背中で泣く赤おに》

「ああ、青おに君。君は、それほどまでにぼくのことを思っていてくれたのか。ぼくは知らなかった。ぼくは、ぼくは…。青おにくーん。」

赤おには戸口に顔を押しつけ、いつまでも、いつまでも泣き続けました。(余韻をもって音を消す)

### 3 いざ、研究授業を開始

教室に暗幕を張りめぐらし、絵話の画面だけがOHPの光に浮かび上がる。

ペープサートを使うため、練習で暗記した資料を情感を込めて語る。最後の場面で涙する児童あり。資料提示は、まずは成功。

#### ① 1番心に残ったところはどこでしたか。

C：山奥で赤おにと青おにが相談したところ。

C：青おにが頭をぶたれたところ。

C：村の人たちが赤おにの家に行ったところ。

C：赤おにがわんわん泣いたところ。

#### ② 青おには村で大あばれしてやろうと、どうして思ったのでしょうか。

C：赤おには村の人たちに家に来てほしいとおもっていたから。

C：赤おにが人間たちと仲良くなれるように。

C：赤おにがかわいそうだから。

#### ③ 赤おににぶたれていたとき、青おにはどんな気持だったでしょう。

C：がまんしよう、赤おに君のためだからがんばろう。

C：これで赤おに君は村の人たちと仲良くなれるよ。

C：約束を守ったよ。

C：これでよし。赤おに君が幸せになれるから。

#### ④ 青おにくんはどうして山を出て行ってしまったのでしょうか。

C：青おにがいたら、赤おには不幸になるから。

C：青おにがいたら、計画がばれてしまうから。

#### ⑤ どうして赤おには泣いたのでしょうか。グループで話し合ってください。

C：そんなにまでぼくのことを思ってくれたから。

C：ぶったりなんかしなければよかった。

C：親友だったのに、2人は離れ離れになってしまった。

C：青おに君が遠くに行ってしまったから。

#### ⑥ 青おに君に手紙を書きましょう。

青おにくん、きみは、なぜ、山から出て行ってまで、赤おにくんにしんせつにしたんだ。出て行かな

くても、青おにくんが村人たちに話してくれるから、早くかえろう。村人も赤おにくんもみんなまっている。早くちがう出口から出てきて、村にかえろう。もうきみは、村人たちと友だちさ。早くいそいでかえろう。村人たちもきみがかえってくるのをまっているから、早くかえってよろこばせてあげよう。ぼくはきみがかわいそうだ。だって、いいことをしたのに、山をでていったのでは、かわいそうだ。赤おにくんや村の人たちとなかよくなってもらいたいとおもう。 河西大道

児童と手紙文の内容は次のような結果だった。

A 青おにに同情と理解を示した児童	6名
B 赤おにに同情と理解を示した児童	17名
C 青おにに感心した児童	12名
D その他	8名

### 4 わたしの道徳授業への示唆

研究授業後の研究協議会では研究員の仲間から、

- 板書が平板すぎた。子どもの意識がどう高まったかが分かる板書の工夫を。
- 第1次感想で浮き彫りになった子どもの意識を次の学習活動にどうつなげていくのか。言わせっぱなしでいいのか。
- 感動教材を与えて子どもの心をゆさぶる。ゆさぶるだけでいいのか。一人一人の受け止め方がうはず。それをどのように授業の出口へ導いていこうとしていたのか。
- 低学年のグループでの話し合いは2人か、3人が望ましいのではないか。代表がグループの意見をまとめて発表したと言っても、結局代表が自分の意見を言うだけではないのか。などのたくさんの意見が出された。 やってもやっても上には上があるものだと、いちいち納得しながら研究協議会は終わった。 最後の指導講評で、古島稔先生が 「今日みんなからの意見をすべて組み込んだ授業をしたとしても、きつとつまらない授業になったと思う。上手な授業即よい授業とは限らず、下手な授業即悪い授業とは限らない。今日の授業は味のある授業だったということにしておこう。」 とおっしゃったお言葉に、なぜかニコツとした。

(東京都世田谷区立東大原小学校教諭)